



Title	身体の芸術論の展開と変容 : 比較芸術学の視点から
Author(s)	潘, 禰
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44407
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	潘 權
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17264 号
学位授与年月日	平成14年7月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	身体の芸術論の展開と変容—比較芸術学の視点から—
論文審査委員	(主査) 教授 上倉 庸敬 (副査) 教授 森谷 宇一 教授 藤田 治彦

論文内容の要旨

人間の活動ことに芸術活動において身体がどのように働くかという問題は、東洋でも西洋でも、さまざまな立場から考えられてきた。「身体」という言葉そのものは主に「精神」と対をなすものとして近代の造語といえようが、それに類似した考え方は中国では『莊子』(紀元前4世紀後半頃)にさかのぼって見出すことができる。本論文の目的の第一は、芸術における身体の問題が『莊子』のうちでどのように扱われているかを明らかにすることである。その扱え方は、論者の見るところ、中国における美学・芸術思想の伝統となった。

中国の伝統をうけついで日本は、明治以降、西洋における身体の見方に出会い、芸術における身体の問題に対し、あらたな見方を提出することになった。それがどのような見方であったかを明らかにすることが、本論文の第二の目的である。

第三の目的は、芸術において身体が果たす役割がさまざまに考えられてきたということ自体に着目して、その多様性と変化のうちに逆に、洋の東西における美学と芸術思想の一貫した流れを明らかにすることである。

本論文は東洋と西洋の美学に一体性を見出そうとする比較美学の試みである。全体の体裁は、注と参考文献表をあわせてA4版、132ページ。考究はつぎのように進められる。

1) 宇宙は陰陽ふたつの原理が調和した気によって構成されているが、人間の精神は合理を求めただけであって、気を把握することはできない。「坐忘」という身体の実践をとおしてはじめて精神はととのえられ(「心齋」、人間は世界の在り方を知り、それに対応する態度を獲得できると、『莊子』は主張する。精神は自己の関心を忘れ(「忘我」、身体と一つになる(「心身一如」)。知は精神のみに依らない。『莊子』は身体の働きを高く評価し、これが中国思想の一基盤となった。

2) 造形活動はただ視覚のみに由来する認識活動であるとフィードラーKonrad Fiedler(1841-95)は考え、手の描く絵はその一連の活動の最終結果であると規定した。そのような認識活動は芸術だけに限られてはいないと西田幾多郎(1870-1945)が考えたとき、東洋の身体論は新たな一步を踏みだし、西洋の身体論も新しい視野を拓くことになった。芸術論におけるその展開は、和辻哲郎(1889-1960)の様式論に探ることができる。

3) 芸術における東洋の新しい身体論は、西欧の伝統との違いを強調するかたちで、久松真一(1889-1980)によって理論化された。それは禅の芸術論とよぶべきものであるが、「心」の概念と「身」の概念がしばしば判然としがたしい。理論を忠実にうけいれながら、心身ふたつの概念を実践において明確に区別したのは、戦後日本の前衛書家、森田子龍(1912-98)であった。

4) 西洋の影響をうけて東洋の身体概念は明晰になったが、それはかえって東洋における「心」の概念に多様性をあたえることになった。久松真一において身体は、その働きの多くが心の領域で実現されている。そうした心による一元化を、森田子龍は芸術の実践において踏みとどまった。芸術の理論において、心へ向かう傾向を身体へとあらためて転じたのは、メルロ＝ポンティ Maurice Merleau-Ponty (1908-619) である。その身体論は、西洋と東洋の伝統をふたつながらに生かして体系化する可能性を示している。

論文審査の結果の要旨

本論文における随一の成果は、東洋の美学と西洋の美学をひとつの視点から捉えることができるということ、説得力をもって示した点にある。論者は長年にわたって、美学と、中国の芸術および芸術思想の研究にたずさわってきた。本論文はその結実である。

美学が東洋を対象にしているとき、その論旨と結論にわたくしたち東洋人自身、得心しない場合は少なくない。美学が西洋で生まれた学問であり、基礎となる概念も、概念をもちいて問題をあつかう方法も、西洋のものであるからだろうか。あるいは、たとえば美しいものについてであれ、絵や彫刻についてであれ、美学がまずは直接、感性をもとにせざるをえないからであろうか。また、西洋で生まれた基礎概念と方法がそのまま東洋思想のなかでは見つけにくいからであろうか。理由はいろいろ考えられようが、論者のこれまでの努力はそうした理由の一つ一つを潰していくためであったと考えられる。

本論文は第一章で、たとえば現在の「身体」という概念を、まず第一に『莊子』で展開される論理の主要な局面ごとに精密に計測し、東洋と西洋の差違を明確にして、誤差の有効性の範囲内で「身体」についての考察をすすめる。計測は手堅く、考察は鋭利である。そのうえで論者は、『莊子』を中国の美学および芸術思想の起源と見きわめている。出発点で読者が抱く信頼は、その後も裏切られることなく、論理が展開するにつれ、ますます強固になって、論文全体に驚くほど新鮮な説得力を生んだ。書をあつかっても、感性に係わる側面は注意深く避けられ、実践の理論面のみに限定するほど、論理は細心である。

では本論文で、東洋と西洋の美学は十分な一体性をしめす仕方と比較され、さらには総合されているかどうか。「身体」という思いきった切り口によっても、両者を統一して見とおす十全な視点はあたえられなかったと、残念ながらいわざるをえない。中国・日本の芸術各論を技術論であると斥けることは、一見識ではあるものの、論文の構造を弱めるからであろうし、西洋美学への目配りもメルロ＝ポンティの一面を捉えるだけにとどまったからであろう。この点が本論文のもっとも大きな心残りである。もちろん、実現したことの大きさに比べれば、この程度の心残りでも本論文の意義が貶められることはない。

本論文は、美学という学問の立場を厳密に守って、東洋と西洋における芸術思想を包括するという大胆なくわだてを試み、その一つの可能性をしめした。本論文は、博士（文学）の学位を授与するに十分ふさわしいと認定する。